
序列最下位の精霊使い

機械 人形

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

序列最下位の精霊使い

【Nコード】

N7011Z

【作者名】

機械 人形

【あらすじ】

精霊と契約した者が通う学園は、序列争いの期間に入っていた。そんな中、序列最下位の如月雅は最下位だから闘わなくていいと戦闘放棄をしていた。すると、自分の契約精霊から「序列争いに参加しなければ契約破棄しますよ?」と脅され渋々参加する。「やるからには一位になろう!」「……最下位が一位を狙うとは下克上ですね」精霊バトル主人公最強ハーレム系ストーリーです!

第0話 プロローグ

契約精霊。

精霊とは自然界にある万物のおおもとになっていると考えられている魂であり、火、水、風、土、氷、星の六系統存在する。

その中でも星の系統は特殊で十二種類しかない。星の精霊の基本は黄道十二星座なので、その数と同じ十二体。

星の系統はそのこと以外詳しいことはわかっていない。

そしてその精霊たちは、人間と契約することによって契約精霊となる。契約する方法は、特に決められていない。戦闘でも話し合いでも。

契約精霊を使う者のことを『スピリチュアル・マスター精霊使い』と呼ぶ。

舞台は、精霊使いのみが通う学園、契精学園。由来は、契約精霊からきているらしい。

そして契精学園に通う序列最下位の生徒、きんげいみやび如月雅の物語が始まる。

第一話 精霊を持たない精霊使い

キーンコーンカーンコーン、と聞き慣れたチャイムの音がする。契精学園の二年四組に在籍している俺こと如月雅は、ダルそうに体を動かした。

契精学園は、高等部と中等部がある。ちなみに俺は高等部の一年生だ。

クラスは一から四までであり、成績が良い順番で分けられている。一組には良い方の生徒が、四組には悪い方の生徒が。

俺は四組に在籍しているが、勉強の成績が悪いわけではない。寧ろ一般よりはかなり良い方だ。

何故頭が良いのに四組に在籍しているかというところ……。

契約精霊が一体も使えない。それが理由だ。

火、水、風、氷、土。俺はその全系統の精霊と契約することができない。

普通なら五つの系統全ての精霊を体内にある魔力量分だけ契約できる。

高位の精霊は一体契約できるだけでも凄いとされている。逆に低位の精霊は複数契約しても魔力が余るだろう。

しかし、俺の場合は違う。子供の頃の記憶はほとんどないが、高位の精霊と契約した覚えはない。低位の精霊もまた然り。

契約すると体の何処かに現れる紋章も、俺の体には無い。学園長直々で調べたので確かだと言えよう。

学園長直々なのは、この学園の先生に男はいないからである。

元々精霊は女の形をしているので、スピリチュアル・マスター精霊使いは女性の方が多い。

そして、学園の先生は必ず元精霊使いでないといけないので、必然的に女性の方が多くなる。

一応男性もいるのだが、力仕事の方が儲かるのであまりいない。学園長はレアなのだ。

閑話休題。

話が逸れたが、ここまでくると残るは一つしかない。

元々体内の魔力が、低位の精霊とも契約することができないほど少なかった、ということになる。

しかし、それはおかしい。

魔力を持たない人間も多数存在するが、それでもやはりおかしいのだ。

この契精学園の入試内容は、近くにある霊力の高い森で精霊を一体契約すること。それは中等部からのエスカレーターでも変わらない。契約できなければ絶対合格できないはずなのだ。

つまり、俺は入試を何らかの方法で通過した、ということ。

まあ、所謂ズルをしたのだ。

正確に言えば、延期ということになっている。なので俺は、在学中に最低でも一体の精霊と契約して、精霊使いにならなければいけない。

他の生徒たちには、ズルをしていることをバレないようにするために学園長に頼んだ。

内容は、如月雅は魔力量が多いのに精霊との契約が上手くいかないので契約を延期している、とのこと。

実際この嘘をみんなが信じてくれて、俺は序列最下位に甘んじている。序列争いに参加しないので悪い気はしない。

しかし、中には異常な程俺に精霊と契約させようとしているやつもいる。

「おい、如月雅。今日こそは精霊と契約してもらおうぞ」

放課後になると何時ものように一人の女の子が俺の席に来た。

彼女の名前は水^{みず}和^わ椎^{しい}名^な。顔は文句無し美人で長い赤髪も綺麗だが、男勝りな口調がちょっと勿体無い。名前に入っている『水』系統の高位精霊を使う。

序列は四位で一組の生徒だ。態々何時も俺がいる一番遠いクラスへまで来るなんてご苦労なこった。

何でかはわからないが、やたらと俺を精霊使いにさせようとしてくる。

「今日はパスで」

「さあ、早く行くぞ。ユウラ、水牢に入れて連れていくぞ」

「椎名様、無理矢理はあまり良くありませんよ」

「……………」

俺の発言は聞き入れてもらえないらしい。

まあ、今日は無駄な抵抗をせず水和さんの言いなりになっておこう。行きたいところも丁度そこだし。

あまり刺激すると水和さんの水系統の精霊、ユウラに水牢という水の牢獄に入れられてしまう。

「自分で歩くから大丈夫だよ」

「お前は信用ならん。何回あの森に連れていったと思っている。それなのに未だにお前は精霊と契約できていない！」

水和さんの長い説教が始まりそうだ。

おっと、まだここは教室だったな。

今説教されたら俺は面目が更に悪くなってしまふ。序列最下位ってことでも悪いのに。

ユウラとアイコンタクトを交わして、説教をしている水和さんを二人で教室の外へ。

「なっ、ちよっ、待て！ 私を押すなー！」

駄々を捏ねる水和さんをスルーして、そのまま近くにある霊力の高い森『ハイスピリット・フォレスト 霊高の森』に向かう。これじゃあ、どっちが連れていかれているのかわからないな。

「も、もう着いただろう！ は、離せ！ 触れるな！」

酷いことを言うなー、水和さんは。心が痛むぞ。

「と、とにかく早く精霊と契約してこい！」

急かす水和さんを後目に、俺は今まで行かなかった奥の洞窟に向かった。

昨日見付けたのだが、日が暮れかけていたので今日にすることに

していた。普段は乗り気じゃない俺が抵抗もしないでここに来たのは、この洞窟を調べたかったからだ。

「結界……？ ああ、ユウラの特大水牢か」

洞窟を少し進むと、水でできた透明の通れない壁が見えてきた。

これは俺に使おうとしていた水でできた牢獄。水牢だ。

ユウラの得意技で、使用範囲から出られなくなる技。ユウラが高位精霊なのも、この技を見れば納得できる。

言わば最強の結界。これから出られる精霊や精霊使いはそうそういないだろう。

推測だが、水和さんはこの結界に入ったユウラ以下の位の精霊を自力で俺に取らせようとしている。

……無理だろ。

完全にやる気が無くなった俺は、来た道を引き返そうとしたが不可解な箇所を見つけ、足を止めた。

「水牢が……破られてる」

数メートル離れた水牢の部分。そこに人一人分すっぽり入りそうな穴が空いていた。

何者かに破られたように見える。しかし、さっき言ったようにユウラ以下の位の精霊は通れないようになっていて、入試でもないこの時期に序列三位以上の人が来ることも殆んどないだろう。

つまり、あの水牢が破れている場所を通って行けば高位の精霊に会えるかもしれない。

俺は帰るために向けていた足を再び水牢へ向け、水牢にできた穴に入った。

好奇心は時に良い結果をもたらす。実にそうであってほしい。

第一話 精霊を持たない精霊使い（後書き）

次話で新しい精霊とバトル展開になる予定です。

プロフィールでお気に入り登録してくださった方、一話で幻滅させてしまったら申し訳ない。

みなさんありがとうございます。

機械 人形より

第二話 初めての契約精霊は幼女(少女) 精霊(前書き)

バトルは次回に持ち越します。
まことに申し訳ありません。

第二話 初めての契約精霊は幼女（少女）精霊

高位精霊がいるであろう場所までは別れ道もなく、ただ真っ直ぐの一本道だった。

怪しい。怪しすぎる。

水牢を越えるまで別れ道があったが、越えてからは、別れ道一つない一本道だ。

それに壁から微かに魔力を感じる。一般の精霊スピリチュアル・マスター使いなら気付かないレベルの。

まるで誘導されているみたいで、気味が悪い。

事前に持ってきておいたランプを片手に小一時間歩くと、広い大部屋が見えてきた。その部屋のみ発光していて、遠目でも発見することができた。

何故発光しているか。それは高位精霊の力だろう。

その読みは当たっていた。俺の目の前に二体の精霊が現れたのだ。厳密にはこっちが現れたんだけど。

片方の精霊は大人の女性みたいな顔立ちで、綺麗な銀髪の美人さんだ。少し弱っていると、この精霊の魔力が不安定なのでわかる。

もう片方は同じ髪色の……うん、幼女。いや、ギリギリ少女かもしれない。まあ、どうでもいいや。

ちなみに二人とも服を着ていない。精霊は自分から服を着ないのだ。契約して、魔力で服を作らせない限りは。

「……初めまして」

沈黙が続いていたので、なるべく直視しないようにしながら話し掛けた。何でかわからないけど、ぎすぎすしている。空気が痛い。

「貴方はここへ何をしにきたのですか？」

美声で話し掛けられて、ビクツと反応してしまった。平常心、平常心。

「俺はただユウラの水牢を破った高位精霊を見にきただけだよ」

「……貴方は既に高位精霊をお持ちになっていますよね？」

「おいおい、何言ってるんだよ。お前は長生きしてるみたいだから知ってると思うけど、ここの所有権を持つてる学園の生徒で、序列最下位だ。高位精霊どころか精霊一体すら持ってないぜ？」

「いえ、貴方は凄い人です。精霊が長生きしているか知るためには魔力を視なければいけない。それはある『眼』が必要ですし、それ相応の魔力も必要です」

いきなり確信をつかれた。この精霊は本当に高位だな。序列一位レベルかもしれない。あの人とは関わりたくないから知らないけど……まあ、一応その眼は持つてるけど、これ自体は俺のじゃないんだ。使い勝手が良いから使ってるけど……っと話が逸れたな」「この人なら大丈夫かもしれないですね……。貴方に頼み事をしてもいいですか？」

途中から俺の話は一切聞かずに独り言をしたと思ったら、いきなり頼み事か。

聞いてほしいわけじゃないんだぜ？ でもやっぱり話くらいは聞いてくれたって……。

切り替え切り替え、っと。

「内容によるけど？ 流石に今のお前と契約することはできないぜ？」

精霊というのは、基本的には人間より早く死ぬのだ。

しかし、それは野生の、契約していない精霊に限る。契約精霊になっっていない精霊は寿命が短く、人間の半分程度で死んでしまう。

何故なら、契約精霊になることによって供給される魔力を受け取れないからだ。当然ただの精霊は力もなく、寿命も短い。

この高位精霊は、ずっとかはわからないが人間と契約を交わさなかつたみたいだ。

彼女と俺が契約できない理由。それは、彼女が魔力切れになるからだ。

契約する瞬間とは、先にこちらが彼女から精霊の生命エネルギー

である魔力を受け取り、それを大きくして流し返すもの。

彼女の残りの魔力量を考えると、彼女が魔力を流せば俺が返す前に消滅してしまうだろう。

それはただ彼女の寿命を削り取るだけだ。そんなことはしたくない。

それ以前に俺は精霊と契約できないし。

「大丈夫です。契約してほしいのは私ではなく、この子の方です。

私は残りの命が短いので、この子のことを任せてもよいですか？」

そう言っつて、幼女……じゃなくて少女を俺の前に差し出してきた。

ああ、服を着てほしい。

「その前に魔力量がカスだから契約できないんだけど……」

「大丈夫です。私が貴方の魔力経由回路を改善しておいたので」

何でかはよくわからないが、とりあえず契約できるらしい。

ものは試した、と契約の為の言葉を言う。

「汝、我と契約を結ぶことに同意し、我が死ぬまで従うことに同意するか」

これ恥ずかしいから言いたくないんだよな。恥ずかしすぎて涙が出そうだ。

「同意」

初めて少女の方が口を開いた。隣にいる大人の精霊と同じで、なかなかの美声の持ち主だ。

その美声に反応するかのように二人の足下から契約魔方陣が出現した。

これは普通に契約するとき承認してくれる魔方陣だ。詳しく知りたいなら国立図書館の最深部にでも行ってみてくれ。厳重に保管された本があるはずだ。

おお、初めて契約魔方陣が出てきた。彼女の言った通り契約できそうだ。

「後は肌を触れ合わせればいいだけ……っつて、うわっ！」

俺が契約最後の説明をしていると、全裸の少女が突進の勢いで抱

き着いてきた。

勢いが強くて、俺が少女に押し倒された形になる。

ちなみにかなり痛い。後ろにあった少し大きめの石に背中をぶつ
けたみたいだ。

俺があまりの痛さに悶えていると、唇に柔らかいものが触れた。

第二話 初めての契約精霊は幼女（少女）精霊（後書き）

新しい精霊は出せましたけど、バトルは……。

次話こそはバトル展開にしたいです。

プロローグ、一話でお気に入り登録してくださった方々、二話で幻滅させてしまったのなら申し訳ない。

しかし、この作品を読んでくださった方々、更にお気に入り登録してくださった方々。

ありがとうございます。

機械 人形より

第三話 初めてのキスも幼女(少女)精霊(前書き)

バトルは更に次回に持ち越します。

まことに申し訳ありません。土下座中ですので許してください。

第三話 初めてのキスも幼女(少女) 精霊

「っ!?!」

不意をつかれたので、一瞬何が起こったかわからなかった。だんだんと思考が回復してくると、目の前の少女にキスをされたのだと理解することができた。

……つて、ええ!?!?

「%#*」

「キチンと言葉を発してください」

変なことを口走っていたようだ。

でも仕方無いよね? 俺はファーストキスだったんだ!

「ちなみに今のは私のファーストキスです」

知るか。お前が勝手にしてきたんだろ?」

「……契約には肌を触れあわせればいいだけで口をつける必要はない」

「私の気分をあげるためです」

「今は必要ないよな!?! 今じゃなかったらいいってわけでもないけど!」

「貴方が早く肌を差し出さなかったから悪いんですよ」

「開き直った!?! それにまさかの俺のせい?」

かなり理不尽だ。それなら俺の頬に手で触ればよかったんじゃないか?

「とりあえず退いてくれないか?」

何時まで俺の上に乗っている気なんだろうか。重くはないけど……うん、石が背中にぐりぐりきてる。めちゃくちゃ硬い。

しかし、彼女は俺の上から降りようとせず、目を閉じて唇を少したきだしてきた。

……えーと。どうしろと?

「早くしてください。今度はそちらからですよ」

期待している(?) 彼女の唇に俺は自分の唇を 近付けずに、
彼女を俺の上から無理矢理降ろした。

「つうつ!!」

やっとのことで立ち上がると、右腕に強い痛みを覚えた。見ると
右腕に不思議な模様が浮かんでいた。

これは紋章だ。契約すると体の何処かに現れるもの。俺の初契約
の紋章は右腕か。

少し大きい気がしないでもないが、まあいいだろう。

「ありがとうございます。……そろそろ時間の……よう……なので
俺たちの契約を隣で見っていた大人精霊の体が、半透明になってい
く。」

精霊の消滅が始まっている。もうすぐ彼女は……。

「では、その子を……頼み……ま……」

言い切る前に、彼女の姿は見えなくなっていた。

「さようなら……お母さん」

隣を見れば、涙を我慢している少女の姿をした精霊。

精霊だって人間と同じで母親がいなくなれば悲しくなるよな。

「大丈夫か如月雅!？」

必死の形相でユウラを連れた水とさんがやってきた。多分水牢が
破られて、そこに俺が入ったのを感じて捜しに来たのだろう。

そして俺と全裸の少女 精霊とわかっていると思うけど を
見て、俺が精霊と契約できたことを悟ったようだ。

俺の沈んでいる様子を察してくれたのか、はたまた契約していな
い精霊は服を着ていないことを知っていたのか、なにもつつこんで
こなかった。

「とりあえず学園に戻ろうか。先にこの子と戻ってきてくれ」

俺がそう言うと水とさんは俺の精霊を連れて、来た道に戻ってい
く。

「約束する。お前の娘は俺に任せろ。だから安良かに眠ってくれよ
な」

先ほどまで一体の精霊が立っていた場所を見つめ、そう呟いた。
幻想かもしれないが、微笑んでいる精霊が俺には見えた。

「で、だ。変態のお前はこのロリ精霊と契約したのか？」

一足先に学園に戻っていた水和さんと合流して、食堂で夜ご飯を食べていた。洞窟を出てみると、外は意外に暗くなっており、時間は七時を回っていた。

この学園は一つの島になっていて、学園と霊高の森と小さなスパー程度しかない。なので、ご飯は大抵ここで食べる。

この時間に食堂でご飯を食べている人は少ないので、俺が精霊を連れていても気付いていないようだ。

「変態はやめてくれ。それとこれでもこいつは高位精霊のはずだからロリ精霊と呼ぶな」

ロリ精霊って……俺が変態って言われるのも納得できるからやめてくれ。

今は魔力供給で魔力を渡して服を着せることができるのに着せていなかったら、言われても仕方無いが、キチンと着せている。そんなことを言われる筋合いはない。

「だが、今までどの精霊とも契約しなかった男が、幼いロリ精霊と契約したんだからそう言われても仕方ないんじゃないか？」

俺の隣で一本一本ラーメンを食べていた俺の精霊　ちなみに名前は、思い付きでティアラとつけた　がピクリと肩を動かした。

名前に關しては無責任だと思うが、俺は特に気にしない。

一理あるので、俺が言い返せないでいると、

「私のことはともかく、ミヤビのことを悪く言うのであれば血祭りにしますよ」

「貴様、私に闘いを挑むのか？」

「ミヤビのことを悪く言えば、鬪いを挑まなくてはなりません」

「喧嘩をするなよ……。なんでそんなに仲が悪いんだ？」

「それは……」

何故かはわからないが、水和さんは顔を真っ赤にして俯いてしまった。

あれ？ 俺なんかいけないこといったか？

「ミヤビは私のファーストキスを奪ったんですから私だけを愛してくださいね？」

ティアラは俺の方を向くと、先ほどと同じように目を瞑り、唇をつきだしてきた。

「なっ！ 如月雅、どういうことだ!？」

「……いくら待ってもやらないからな？」

俺が水和さんを見つめ、呆れながらそう言うと、ティアラは雷でも打たれたかのように立ち上がりよろめきだした。

「裏切りましたね？ ここで私とミヤビのラブラブぶりを見せつけなければ調子に乗りますよ？」

裏切っていないし、誰が調子に乗るんだろうか？ 今ここにいる人で調子に乗りそうな人はいないと思う。いや、わからないけど。

「無視された……この私が無視された……」

水和さんは病んでいるようだ。そつとしておいてやろう。

「如月はいるか!？ 僕と精霊勝負をしろ!」
スピリットバトル

食堂の入り口から眼鏡を掛けた黒髪のいかにも勉強できそうな男が現れた。

俺を捜しているみたいだな。精霊と契約したことを聞きつけたのかも知れない。

無意味な争いをしたくなかったので、ティアラを連れてこそそと非常口から寮に戻った。

第三話 初めてのキスも幼女（少女）精霊（後書き）

じ、次話こそはバトルを……。なんかバトルから逃げてる内容ですが……。

題名の『初めてのキス』を『ファーストキス』にするか迷ったんですが、前の題名と合わせることができるので、こちらにしました。プロローグ、一話、二話でお気に入り登録してくださいました方々、三話で幻滅させてしまったのなら申し訳ない。

しかし、この作品を読んでくださった方々、更にお気に入り登録してくださいました方々。

ありがとうございます。

機械 人形より

第四話 精霊勝負を契約精霊と（前書き）

ギリギリセーフ！短くなり、すいません。年越しにあわせました！

第四話 精霊勝負を契約精霊と

「さあ、僕と精霊勝負をしてもらおうか」

食堂から逃げ出したまではよかったが、寮の前にインテリ眼鏡の部下らしき奴らが待機してあってあっさり捕まってしまった。

そして、現在自宅にて束縛中。

まあ、闘ってみるのもいいのかもしれない。

一応ティアラが何精霊かは聞いたけど、実際に使えるかどうか試してみたいというのもある。

「何処でやるんだ？ こんな時間に先生は動いてくれたのか？」

精霊勝負をするには、結構広い範囲が必要だ。しかし、もう一つ必要なもの。それは勝敗を見届ける立ち会いの先生だ。これは夜遅いから無理だったのではないだろうか。

「いやー、精霊を持ってなかった生徒がいきなり精霊持たのを聞いてな。更に精霊勝負もするって言われたら来ないわけにはいかないだろう？」

ドアから入ってきたのは、俺のクラスの担任ことゆめせんじ夢千治葉菜先生だ。

夢千治先生は、元々この学園の精霊スピリチュアル・マスター使い。序列はわからなかったが、クラスは一組だったそうだ。

「準備は全て揃っているんだ。だから君はもう断ることができないのさ」

言い訳になるかもしれないが、逃げたのは闘うのが面倒だっただけで断るつもりはなかったんだけど。

「ああ、わかったわかった。で、何処でやるつもりなんだ？」

「遊技場に来い。先に行っているからな」

はあ……面倒なのに巻き込まれたな、俺も。

とっとと終わらせるために急ぎ足で遊技場に向かう。

遊技場とは、契精学園の入り口辺りに建てられている木造建築物

で、外側からだとはボロそうに見えるが内側は確りしていて、魔力補助もされている。

魔力補助とは、固体や気体、液体に特殊な道具で魔力を流してコーディネートすることだ。一般に、武器の強化等に使われる。

契精学園では、それを遊技場の内部を守るために使用しているので、精霊勝負をする時は大抵の場合遊技場だ。

「ルールはどうするんだ？」

「時間は無制限。ここにあるものなら何を使ってもいい。そして、契約精霊は二体までだ」

……ズルくないか？

俺はティアラ以外の契約精霊を持ち合わせていない。なら相手は二体使えるのにこちらは一体しか使えないことになる。

「まあ、それでいいよ。早く始めよう」

「汝、私の問い掛けに答え、その姿を表せ！ そして スレリコール 精霊召喚

！！」

インテリ眼鏡 白地って名前だった は、右手で眼鏡の中心を上げると自身の契約精霊を召喚した。

精霊召喚とは、わかると思うが名前の通り、体の何処かにある紋章に魔力を送って精霊を召喚する行為のことだ。

俺はさつき契約してから、一度もティアラを精霊界に返していないので、掛け声も精霊召喚スレリコールをする必要もない。

白地の精霊は、赤い髪をしていて炎を纏っているので、多分炎系統の精霊だろう。

「ティアラ、 になってくれるか？」

「わかりました」

俺も闘うためにティアラを戦闘用に変化させる。

精霊には、武器に変化する精霊とそのまま闘う精霊がいる。さつき聞いたところティアラは前者だそうだ。

隣にいたティアラの体が光に包まれ、光が消えたときには

雷を纏った剣に変わっていた。

第四話 精霊勝負を契約精霊と（後書き）

年越し！

第五話 自分も知らない二体目の精霊（前書き）

バトル書くの下手ですみません。
温かい目で見守ってください。

第五話 自分も知らない二体目の精霊

雷を帯びている剣状態のティアラを振るい、白地の契約精霊が放つ炎を弾き飛ばす。

ティアラは、全系統の剣になれるという他の剣になれる精霊に申し訳ないやつで、全系統全てにそれぞれ能力がある。

今使っている雷なら、相手の魔法を弾いたり消去したりすることができる。

他の系統の場合は、その都度言うことにしよう。こっちもそろそろ余裕がなくなってきた。

俺が攻撃をいなしていることに苛立ちを覚えたのか、白地の魔力供給量が増えている。あの量だとすぐに魔力切れになるぞ。

「調子に乗るな!!」

とうとう堪忍袋の緒が切れたのか、ほぼ全ての魔力を炎の精霊に流した。

当然炎の精霊が持つ魔力が多くなるので、威力や大きさも大きくなっていく。雷を纏った剣のティアラ一本では厳しいかもしれない。しかし、別の精霊を持っていないのでこれでいくしかないか……。

いや、ティアラだけで十分だ。

言い忘れていたが、雷系統の精霊は存在しない。ティアラは、複数の系統を混ぜることで雷を作り出しているのだ。

多分雷のように複数ではなく、単体の系統だったら今頃あっさり負けているだろう。

白地の精霊が放った炎をティアラで無効化した瞬間、

「そこだ!!」

キンッ!!

手元から高音がしたと思ったら、俺の持っていたティアラが少し前の上空をクルクルと回っていた。

右側を横目で見ると、小さい剣を片手に持った白地が勝利を確信

したように微笑んでいる。精霊にばかり気をかけていて、白地のことをすっかり忘れていた。

今までならこのまま負けてしまってもいいと思うだろう。しかし、何故か嫌だ。勝ちたい。

そう思っていると、白地がニヤリと先程より気色の悪い笑みを浮かべながら剣を振りかざしていた。

そんな様子も今の俺には特に気にならない。

何だか右腕が熱い。力が湧いてくるようだ。あまりの熱さに思わずしゃがみこんでしまった。

「汝、私の問い掛けに答え、その姿を表せ。精霊召喚^{スベリコール}」

低い声でそう言った。白地が剣を振りおろすのとほぼ同時。いや、一瞬俺の方が早かったかもしれない。

そんなことはどうでもいい！俺は自分の口から今まで口にしたことのない言葉を聞いて、不思議と勝てる気がした。このまま身を任せれば何かが俺を勝たせてくれるかもしれない。

ん？………待て。白地の剣は何処へ？

俺が確認した限りでは、俺目掛けてほぼ垂直に振りおろしていたはずだ。しかし、痛みを全く感じない。それどころか逆に力が溢れてくる。

俺は恐る恐る白地がいる方を向く。

「……………え？」

目の前に現れたのは、白地ではなく男の精霊だった。

「よお。久しぶりだな、ガキ」

顔だけを後ろに向けて挨拶をしてくる。その精霊は、見た感じだと二十歳ぐらい。茶髪の髪には動物の耳がピコピコと動いていて、同色の尻尾もフリフリ振っている。金色の眼に睨まれたらそれだけで人を殺せるかもしれない。

「久しぶり…………？俺はお前に会ったことがあるのか？」

会ったことがないはずだ。会ったとしても全く覚えていない。

目の前の精霊は、きょとんと目を見開いて驚いた後、ああそうか、

と一人で納得した。

「まあ、覚えてねえのも無理はねえ。お前はあの時俺たち全員を出して意識を飛ばしていたからな」

「あの時？」

俺は昔記憶喪失にでもなったんだろうか？ 意識がなくてもその後のことくらいは覚えていそうなのに、それも全く覚えがない。

「その話はまた今度でいいだろ？ 今は目の前のやつだけ。ああ、忘れてんなら言ツとくわ。俺の名はレオ。よろしくな」

レオは、クイツと親指だけ立てた手で自分の目の前を指す。

横から覗き込むと少し離れたところに、不思議なものを見たような表情をした白地がいた。驚くのも無理はない。俺でさえ自分が二体目の精霊を使えるとは思わなかったからな。

先生たちは……みんな白地と同じような顔をしている。とりあえず白地を倒してから話をすればいいか。

パツと素早く立ち上がり、レオに問い掛ける。

「お前は武器になるのか？」

「いや、ちげ違い。俺の能力は融合シンクロだ」

「シンクロ？ 初めて聞く能力だな。どうなるんだ？」

「聞くより実際にヤツてみた方が早はええだろ」

直後、レオの体が光に包まれた。ティアラの時と同じだ。

しかし、光となったレオは、ティアラの時とは違い手元で具現化せず、俺の体に吸い込まれていった。うえ、なんか気持ち悪い。

呑気にそんなことを思っていると、レオであろう光が俺を丸ごと包み込んだ。

自分が自分ではなくなるような感じた。

だんだん光が消えてきて、辺りがぼんやりと見えてきた。ん？

こつちを見ている白地の顔が蒼白になっっている。……何で？

『お前の姿が変わッてッからだよ』

何処からかレオの声が聞こえた。しかし、光りも完全に消えたというのに姿が見えない。

『融合してんだから見えるわけがねえだろ』

……そうだったな。完全に忘れてた。

『ちなみに今のお前にはいろいろ付いてツからな』

付いてる？ 何が付いてるんだ？

俺は徐に身体中を触ってみた。おお！ 爪が動物のそれみたいだ。なんかカツコいい。

耳や尻尾も付いている。……レオの特徴を引き継いでるみたい。

いやまあ、融合してるんだけど。

『とりあえずさっさと倒しちまおうぜ。相手もやる気が戻ったみてえだからよ』

「あ、ああ。わかった」

蒼白だった白地は、何とか立ち上がり炎の精霊に指示をしている。俺は腰を屈めて、力いっぱい地面を蹴った。

第五話 自分も知らない二体目の精霊（後書き）

レオ……名前でわかった人は、理系ですね。

プロローグ、一話、二話、三話でお気に入り登録してくださった方々、四話で幻滅させてしまったのなら申し訳ない。

しかし、この作品を読んでくださった方々、更にお気に入り登録してくださった方々。ありがとうございます。

機械 人形より

第六話 何故か俺には序列上位が集まる(前書き)

雅のハーレム羨ましいです。

意外に総合評価が426pt。まだまだ頑張ってください。

第六話 何故か俺には序列上位が集まる

自分が自分ではなくなる、という感覚は強ち間違いではなかった。実際に地面を蹴ってみたのに感触がない。いや、正確には痛みがないと言った方が正しいと思う。

『間違えてはないな。実際俺の身体はお前の体の中にあっってお前の身体は俺の体の中にある』

おえ。吐きそうだな。それってよく考えたらめっちゃ気持ち悪いことだぞ。

『まあ、気にすんな。表面上がお前だから感覚は俺が持つてるだけだ。逆になれば痛みはお前が受けることになるんだぜ？』

それは悪かった。痛みは大丈夫なのか？

『地面を蹴ッただけだぜ？ そんな心配することじゃねえよ。痛みは二分割されて半分は自然消滅してくれッからよ』

そうなのか。なら大丈夫だな。

俺がレオと思考でやり取りしている時間は僅か数秒。その間、既にティアラを拾い上げて、白地の後ろに到着していた。序でに左から剣になっているティアラを首に当たらないように添える。

白地は俺が瞬間移動したのかと思ったのか、辺りを見回した。左を向けば、当然剣が添えらる。

一秒もたたない内に、白地は口から泡を吹いて気絶してしまった。根性なしだな、こいつ。弱いにも程がある。

一瞬の出来事にポカンと口を開いて驚いている夢千治先生ゆめせんじに声をかける。

「夢千治先生、勝負は俺の勝ちで終わりですよね？」

「あつ、ああ。勝者は如月雅だ。私は一応こいつを保健室に連れていくからお前は先に帰っておけ」

もとよりその気だった俺は、わかりました、と一応返事をして部屋に戻るうとした。

が、何故か体が全く動かない。力が抜けて、その場に倒れ込んでしまう。脱力感が半端じゃない。

いつの間に来ていたのかわからないが、水とさんや名のある数名の生徒がこちらに走ってくる。

だんだんと視界が暗くなっていく。多分魔力の使いすぎだろう。薄れていく意識の中、俺は初勝利の優越感に浸っていた。

目が覚めると俺は、何処かのベッドの上で美少女ナースに　と　　という甘い展開にはならなかった。

まあ、ベッドの上ってというのは合っている。契精学園の第二保健室だけだ。

しかし、看病してくれているのは、水とさんや『鬼神姫おにめ』と呼ばれる序列三位の福音寺ふくおんじさんだ。

他にも交代で何人かが俺に付きっきりで部屋にいる　いや、見張りをしている。

理由は、俺が精霊と契約したという情報を知った記者部の人たちが、何人も押し寄せてきたかららしい。

俺が気絶した間に来たみたいなので、直接的には何も聞かれなかった。まあ、多分白地が話してると思うけど。

それにしても……俺の周りには、何故か強い人が多い。

交代していてこの場にはいない人も合わせて、みんな序列三十位以上。

この学園は、一学年百二十人程度に対してクラスが四つなので、一クラスは三十人になる。つまり、俺の見張りをしている人たちは、全員一組のメンバーなのだ。

有名人になった気分。何処と無く嬉しい。

初勝利と有名人になった気分で二重の優越感に浸っていると、見張り交代の時間がやってきたようだ。水とさんと副音寺さんは、俺

に一言告げると保健室から出ていった。

その二人と入れ替わるように入ってきたのは。

「や、夜院やいんさんに風文かざふみ！」

「ああ、我が愛しの雅様！」

「みーやびー！ 会いたかったよー！」

夜院さんと風文は、俺のベッドに駆け寄ってきて、大胆にも俺の胸に抱きついてきた。

よりによって夜院さんと風文が来るなんて……。

夜院さんこと夜院未来さんは、腰辺りまで伸ばした綺麗な黒髪をお持ちで水とさんに劣らないくらい美人。

見た目によらず「火雷神ひらいしん」と呼ばれている序列二位の精霊使いで、火と雷でいえば学園最強の使い手である。

由来は、攻撃を一手に引き受ける避雷針と学園一の火と雷の使い手の意味を表して、掛けているかららしい。避雷針と火雷神を。

ちなみに、序列一位は氷と風とその二つを合わせた光の使い手だ。だから火と雷では、夜院さんが最強になる。

次に風文は小学生、よくて中学生に見える外見とピンクの髪をツインテールにしているのが特徴の女の子。

彼女は「風神子かづみこ」と呼ばれていて、序列は六位と夜院さんには劣るがトップクラスの精霊スピリチュアル使いだ。

こちらの由来は、学園内で風系統の精霊使いなら二位を誇る使い手だからである。風系統の一位は、風と雷を使う序列一位の生徒だ。俺は抱きついてきた二人の女の子を見て重々しい溜め息を吐いた。

正直に言うと、夜院さんと風文は苦手だ。

恥ずかしいからやめてくれと言っているにも拘らず、会う度にこうやって抱きついてくる。それがとてつもなく嫌なのだ。

「倒れたって聞いたけど大丈夫なのー？」

「私も倒れたとお聞きになりましたが……」

本当に俺のことを想（思）っているからこっちは何も言えなくなる。

「大丈夫だよ。単なる魔力切れだったし」

「魔力切れ……ですか？ 雅様は学園で一、二位を争う魔力量をお持ちだと伺っていたんですが……？」

「いや、まあ……二重召喚デュアルサモンをしたから……」

「に、二重召喚ですか！？」

「やっぱりみやびは凄いな！」

びっくりしている夜院さんと褒め称えている風文はさておき、二重召喚の説明をしよう。

二重召喚とは、その名の通り一体の精霊を召喚し、存続させながらもう一体の精霊を召喚することだ。

二体同時に使用できるので、戦闘面では使いやすい。しかし、一体づつ使うより多量の魔力を消費するので並の精霊使いは二重召喚ができないのだ。

魔力量は、すでに多いと知られているので、夜院や風文が口々に言っているのは二体同時の方だろう。

「俺にも昔精霊を契約した記憶がないんだけど、すでに精霊を所有してみたいなんだ」

「もう一体はー？」

ハイスピリット・フオレスト

「今日、霊高の森で契約してきたんだ」

「そちらはどんな精霊なんですか？」

実際に見せた方が早いだろう。ティアラを召喚するための魔力は……よかった、ちゃんと回復してる。

魔力は基本的に寝ることで回復することができて、先程気絶してたのも寝ていたことに入ったんだろう。

俺は右腕に魔力を送り、あの恥ずかしい台詞を呟いた。

「どうしたんですか、ミヤビ」

「ー」

「ー」

俺、夜院さん、風文は、みんなそろって口を上下にパクパクさせていた。

何でかって？

ロリ代表のティアアラが服を着ていなかったからさ。

第六話 何故か俺には序列上位が集まる（後書き）

プロローグ、一話～五話でお気に入り登録してくださった方々、六話で幻滅させてしまったのなら申し訳ない。

しかし、この作品を読んでくださった方々、更にお気に入り登録してくださった方々。ありがとうございます。

機械 人形より

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7011z/>

序列最下位の精霊使い

2012年1月12日23時55分発行